

日本鍼灸師会共催学術講習会－関東ブロック－日時：6月26日（日）、13：00～16:15

鍼刺激が上部・下部消化管に及ぼす影響
—自律神経を介した鍼刺激による消化管運動の制御とそのメカニズム—

帝京平成大学 ヒューマンケア学部 鍼灸学科 今井賢治

機能性胃腸症や過敏性腸症候群はストレスとの関わりが大きいとみなされ、未だ決め手となる治療は無い。一方、体性刺激の範疇にある鍼治療は、ストレスの軽減やそれによる消化管機能の異常を改善することが多く報告されてきた。今回その作用とメカニズムについて概要を紹介する。

これまでに、機能性胃腸症患者では胃電図に *dysrhythmia* が認められること、さらに四肢への鍼通電により胃症状の緩和とともに、胃電図 *dysrhythmia* の減少が得られ、正常波形成分が増加することを確認してきた。すでに鍼による胃運動に対する作用と機序は、腹部への刺激で交感神経を遠心性に介して抑制し、四肢への刺激では副交感神経を介して亢進させることが知られている。そして、胃運動の *dysrhythmia* に対して、迷走神経刺激や胃への直接的な *pacing* により、律動的な胃運動機能を回復させるという試みも行われている。四肢への鍼刺激は、体性-内臓反射により、迷走神経を間接的に刺激するため、機能性胃腸症患者の胃運動機能異常に対する簡易な治療手段として応用できる可能性がある。

また、機能性胃腸症患者に多い嘔気に関するモデル実験として、健常人を対象とした視覚性動揺病誘発時の胃電図 *dysrhythmia* と嘔気症状に対する鍼通電刺激の効果を確認した。その結果、鍼通電刺激により有意な改善が認められた。さらに、視覚性動揺病誘発時には血中バソプレシン濃度が増加することに着目し、バソプレシンをラット腹腔内投与した際、胃排出能遅延が引き起こされ、鍼通電によりその反応が有意に抑えられることが確認できた。

さらに、拘束ストレスにより結腸運動を亢進させた過敏性腸症候群のモデルラットにおいて、鍼刺激はその正常化を行うことが示された。

これらの知見から、鍼刺激のような体性刺激が自律神経を介して消化管運動を改善させることが明らかとなり、より臨床応用の広がりが期待できるだろう。

キーワード：鍼、消化管機能、自律神経、ストレス